

木梨助三郎殿

右は延寶六年也。  
 又金澤町會所留記に載せたる元祿六年八月の達書にも、こ  
 う類・地黃煎などの儀は町續にて賣申儀は苦間敷云々。同  
 九年七月の達書に、ぢわうせん並あめ等、今般米拂底に付、  
 公儀被召上之外商賣指止云々。と見たり。右達書共にて  
 考ふるに、此の頃の地黃煎といふものは、地黃に米・麥など  
 を加へ、飴汁の如く作りなし、子供の慰みものになせるに  
 や。享保十二年に筆記せし咄隨筆に、八幡の祭り土産に地  
 黃煎・棒飴など多く喰ひければと、子供の事を書き載せた  
 るにても知られけり。さて地黃煎町をば昔は古地黃煎町と  
 呼びたるに據りて考ふるに、往古此の地にて地黃を煎じ、  
 製菓をなしけるに依つて、古地黃煎の名ありしかど、其の  
 製法をなす事絶えたる後は、いにしへよりの餘波にて、飴  
 汁の如きものを製し、之を地黃煎と呼びて、子供の慰もの  
 に賣り出したるならんか。或は云ふ。地黃煎と呼べるもの  
 は即ち飴なり。今も飴をば地黃煎飴と呼べりといへり。按  
 ずるに、地黃煎と飴とは元より別品なり。前顯寛文二年五

月の達書に、地黃煎御停止被仰出處、あめと名付け在々  
 へ入込賣申由。と見れ、元祿九年七月の達書に、ぢわうせ  
 ん並あめとあるにてもいちじるし。又今金澤にて飴をば地  
 黃煎飴と呼べるものは、そのかみ地黃煎町に飴を製出せる  
 商人多く居て卸賣になしたり。此の地の製飴は、他所に製  
 するとは、其の製密にして風味よきとて、世人賞翫し、之  
 を地黃煎飴と呼べり。地黃煎飴は地黃煎町飴の略稱なりと  
 いへり。然るに後には他所にて製せし飴をも、地黃煎飴と  
 稱するやうに成りたり。若松飴は河北郡若松村の名産に  
 て、昔は賞翫せしかど、後には若松飴とて、金澤觀音町の  
 飴屋に製造して、若松村には却りて製造を止めたるにても  
 知られけり。されば地黃煎飴も若松飴とひとしく、製出せ  
 る地名を以て名に呼べるものなる事知られけり。

○地黃煎町八幡社

此の神社は、地黃煎町の街尾往來脇にありて、地黃煎村等  
 六十餘戸の産土神なり。舊藩中は犀川河上山伏賢高寺の持  
 官にて、從來神人等もなきゆゑに、社の來歴等詳かならず  
 といへり。但し明治五年十一月村社に列せらる。

○承證寺藪

地黃煎町にあり。舊傳に云ふ。此の地は、昔泉寺町法華宗  
 承證寺の舊地にて、昔此の地にて八町四方の寺地を賜は  
 り、爰にありしかど、後今の泉寺町なる寺地を賜はりて移  
 轉す。故に今竹林と成るを承證寺藪と呼べりと云ひ傳へた  
 り。按ずるに、貞享二年の承證寺由來書には、古寺町に寺地  
 拜領之處、水損に付、爲替地・泉野今之屋敷拜領被仰付。と  
 ありて、地黃煎町の地に寺ありし事を記載せず。三州奇談  
 に云ふ。富樫氏の代に久保橋の間に淨専寺と云ふ寺あり  
 と。今按ずるに、承證寺の寺跡といひ傳ふるもの、若しく  
 は淨専寺の事にて、此の地にいにしへ淨専寺といふ道場あ  
 りたるにや。

○地黃煎町菜園

此の町端は、畑地にて名高き菜園なり。春は菜種の花盛り、  
 目も及ばぬ程黄色に咲きつき、その培養實に他村の菜種  
 と異也。故に種實の收納餘村に倍せり。其の他南瓜或は麥  
 なども、他所よりは能く成熟すといへり。土屋養休の耕稼春  
 秋に、大根所は諸江村・笠舞村・泉野村・古地黃煎町・十一屋

村なり。此の外赤土村の近邊大分に作る。といへり。耕稼  
 春秋は寶永の頃の著書也。然れば寶永の頃、右の村々をば  
 大根畑の最上なる地とせし事知られたり。

○地黃煎町蕃薯

蕃薯は、金澤にて薩摩いもと呼べり。従前は薩摩邊より船  
 積になし僅に渡來するまでにて、北地の寒國には産し難  
 く、培養なし得ざるものとしける處、舊藩十世權中將重教  
 卿諡泰雲公の時、明和元年八月算用場奉行より郡方諸奉行  
 への達書に、薩摩芋・琉球芋・加越能三州に出來候様に可申  
 付旨被仰出、前々越中筋には出來之様子、今以出來賣買に  
 も可相成程にも有之哉、培養方委曲可申聞旨被仰出。と  
 ありて、泰雲公の尊慮より起りて、加越能の諸郡郷里にその  
 培養始るといへども、とかく邑民共此の蕃薯を培養せし覺  
 なき故にや、産出する事なかりしが、天保の飢饉の時、三ヶ  
 國とも食用に事を欠き、諸郡郷里餓死するもの少からず。  
 飢饉の後郡奉行より里長へ説諭し、里長共各組下の村民へ  
 告諭して、初て諸郡郷里に培養する事を了得し、各村培養せ  
 し中にも、此の地黃煎町の島地に産するものは、色赤く味